

2007年度後期情報リテラシー実践Ⅱ A B 授業評価報告

基礎教育センター・教授
永井正洋

はじめに

本稿では、2007年度後期末に行った、情報リテラシー実践Ⅱ A B についての授業評価アンケート（S E, T E）の結果を報告する。また、過去2年間の満足度も加え、経年変化を示す中で、今後の科目の方向性について若干、述べる。

授業評価アンケートは、本年度と昨年度で違いがあり、一つには、回答方法で、全てのクラスが、Network-learningシステムを用いてアンケートを実施したことがあげられる。また、内容に関しては、アンケートの質問項目がF D委員会によって精査され、縮約されたことが異なっている。

方 法

以下の様に授業評価アンケートを実施した。

実施時期： 2008年1月7日～2月1日

学生による授業評価（SE）：

対象： 首都大学東京 情リテ「A B 受講者

回収数／人数： 541人／563人（96.1%）

方法： BlackBoard（25クラス）

マークシート（0クラス）

教員による授業評価（TE）：

対象： 首都大学東京 情リテ.担当教員

回収数／人数： 11人／11人（100%）

方法： BlackBoard（11人）

マークシート（0人）

結果と考察

まず、図1の「S E回答の度数分布」を見ると、「強くそう思う」と「そう思う」を合わせて7割を超えている質問項目は、「問1：態度」、「問2：意識」、「問4：対応」、「問11：チューター」であった。これは、学生自身が意欲的に授業に取り組んだと認識していると共に、教員やチューターといった指導する側の対応も良かったと捉えていることを示しており、指導する側と指導される側の関係が良かったことを示唆していよう。なお、「問1：態度」、「問4：対応」の相関は、 $0.441^{**} (**p < .01)$

で中程度の相関を示す。しかしながら、授業外の学習時間に関しては、9割弱の学生が、「ほぼ0時間」、「1時間程度」と答えており、授業中の良い学習環境や学習意欲が時間外に接続していないことが分かり、今後の課題となる。

次に図2、表1を見ると、満足群と非満足群とで、差が大きかった上位2つは大きい順に、「問8：満足」（1.64）、「問3：説明」（1.29）である。また、これら2つの観測変数の相関係数が $0.646^{**} (**p < .01)$ であることを考えると、理解される授業を構成することが、学生の満足を得る上で重要なことが分かる。

次にT Eの質問項目別の平均であるが、図3、表2において、満足群と非満足群で有意差があったのは、「問1：態度」、「問4：対応」、「問5：時間」、「問8：満足」であり、クラスによって学生の学習意欲や授業外課題の時間、学生への対応という点で、教師の認識に違いがあることが分かる。その結果、全体の満足度にも差異が表出しているのではないかと推察される。ここでも、「問1：態度」、「問4：対応」がセットであがっているが、相関係数は、 $0.616^{**} (**p < .01)$ と中程度の相関があった。これは学生の意欲が教員の対応と関係していることを示している。学習時間に関しては、学生側の学習時間は、全体として低かったが、教員の出した課題時間には差異があることが分かったので、今後は教員の出した授業外課題の時間と学生の授業外の学習時間にどのような関係があるのか追求したい。

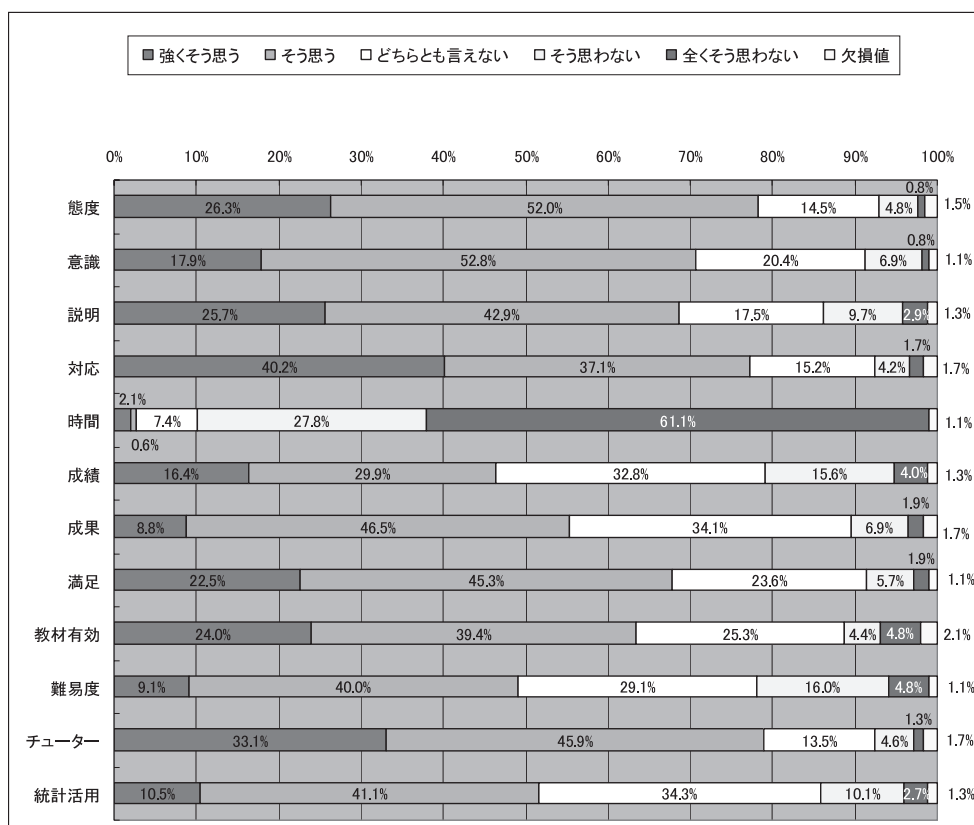


図1 S E 回答の度数分布

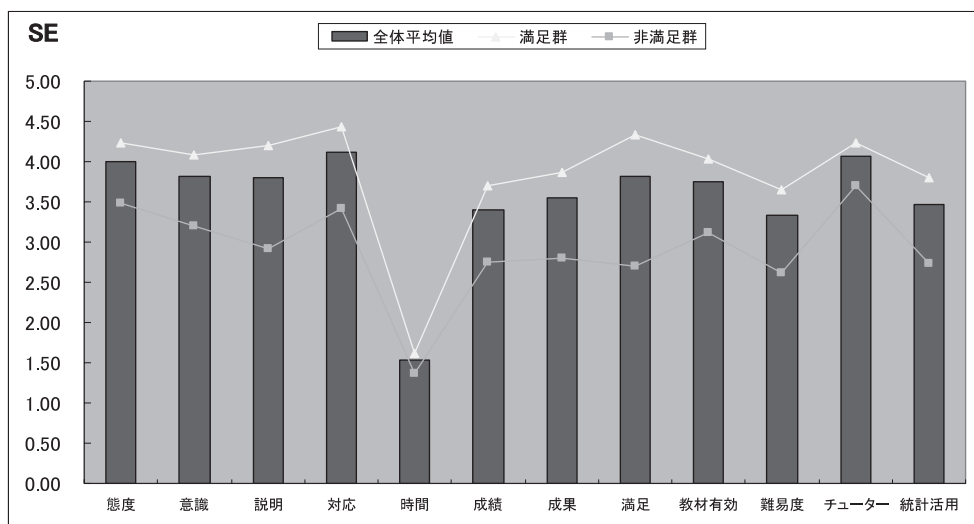


図2 満足度別の平均値のグラフ (S E)

SE	N	態度	意識	説明	対応	時間	成績	成果	満足	教材有効	難易度	チューター	統計活用
全体平均値		4.00	3.81	3.80	4.12	1.53	3.40	3.54	3.82	3.75	3.33	4.07	3.47
標準偏差		0.83	0.84	1.03	0.94	0.83	1.06	0.83	0.91	1.03	1.01	0.88	0.91
非満足群	748	3.48	3.21	2.92	3.41	1.36	2.76	2.81	2.70	3.12	2.62	3.70	2.74
満足群	322	4.23	4.08	4.20	4.44	1.62	3.69	3.87	4.33	4.04	3.65	4.23	3.80
p		.000	.000	.000	.000	.001	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000

表1 満足度別の平均値 (S E)

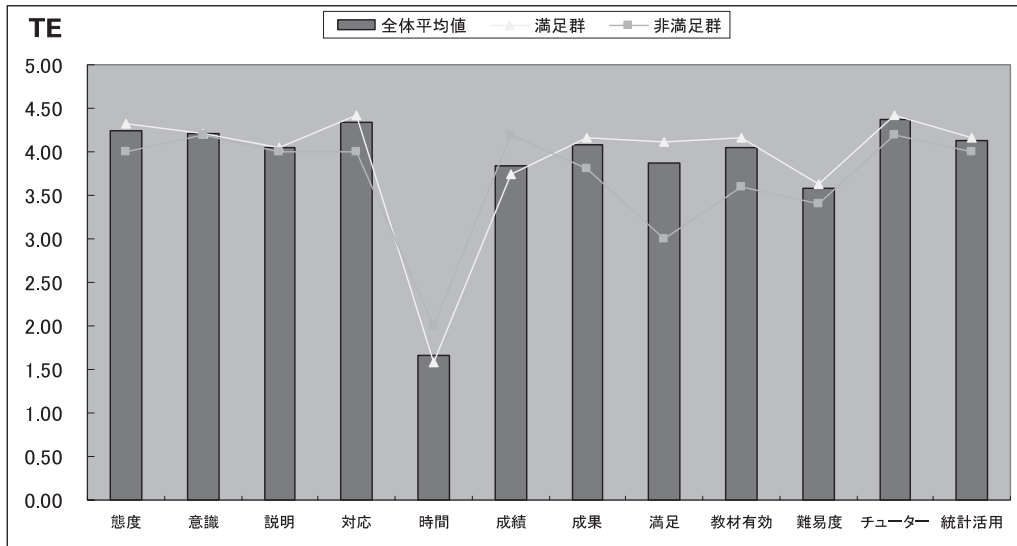


図3 満足度別の平均値のグラフ (S E)

TE	N	態度	意識	説明	対応	時間	成績	成果	満足	教材有効	難易度	チューター	統計活用
全体平均値		4.25	4.21	4.04	4.33	1.67	3.83	4.08	3.88	4.04	3.58	4.38	4.13
標準偏差		0.53	0.41	0.46	0.56	0.56	0.96	0.41	0.54	0.55	0.65	0.58	0.34
非満足群	5	4.00	4.20	4.00	4.00	2.00	4.20	3.80	3.00	3.60	3.40	4.20	4.00
満足群	79	4.32	4.21	4.05	4.42	1.58	3.74	4.16	4.11	4.16	3.63	4.42	4.16
	p	.030	.961	.827	.007	.007	.350	.081	.000	.239	.493	.457	.083

表2 満足度別の平均値 (S E)

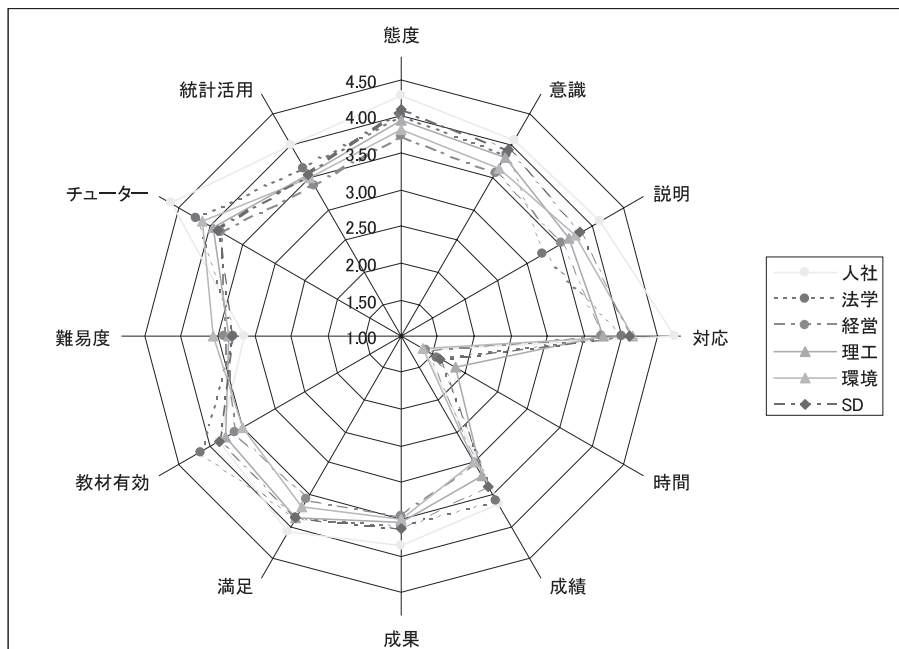


図4 系列による平均値の差

次に、図4では、各学部学系による違いが示されているが、最も肯定的に回答をしている学部学系では、他と比べ、平均値が全12質問項目中、9項目で一番高い。その9項目で、平均値の上位3つの項目は順に、「問

4：対応」(4.71)「問11：チューター」(4.60)「問1：態度」(4.27)である。このことは前述と同様に、教員やチューターの指導する側と、指導される側の学生が良い関係で授業を構成していると学生が認識した学部学系

では、満足度が高いことがうかがえる。

最後に、図5で示される「クラスデータとTEデータの比較」について、述べたい。「5：強くそう思う」、「4：そう思う」の割合が、教員の方が上回っている項目数は、12質問項目中、9項目であり、昨年と同様に教員の授業に対する認識と学生のそれとは違いが見られ、教員が比較的高く自身の授業構成を評価しているのに対して、学生は若干、低い評価となっている。

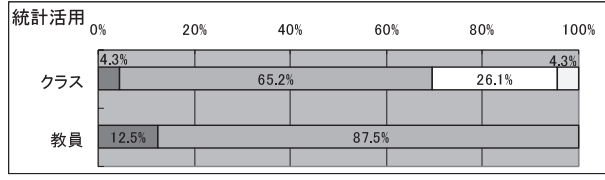
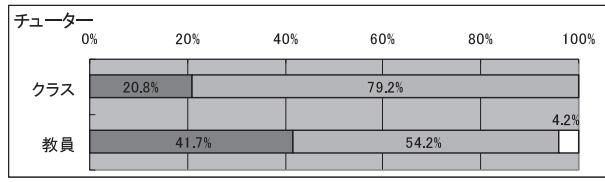
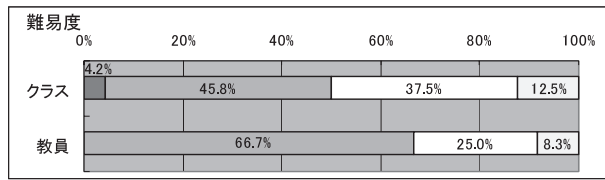
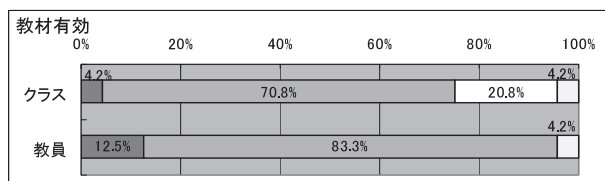
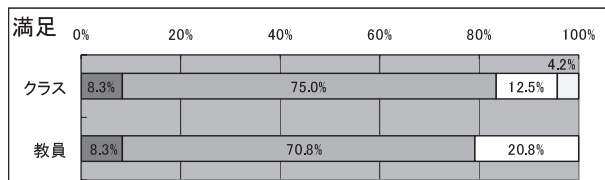
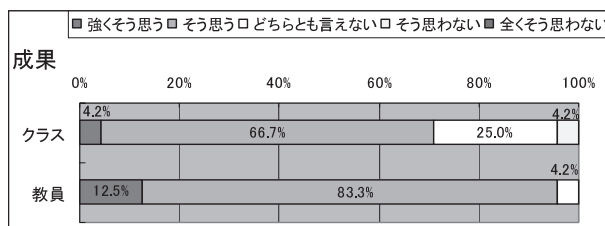
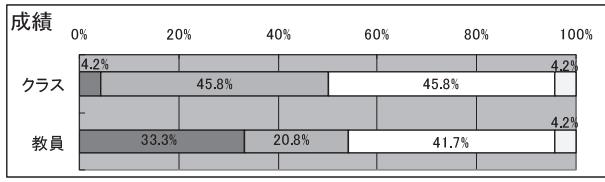
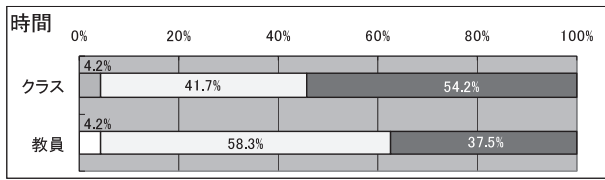
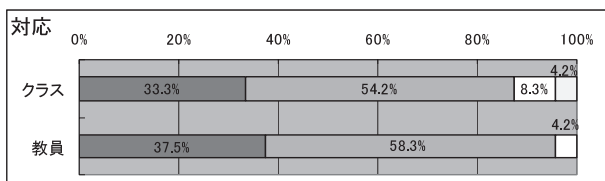
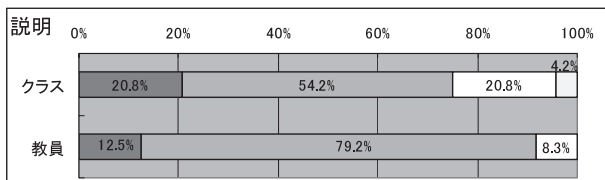
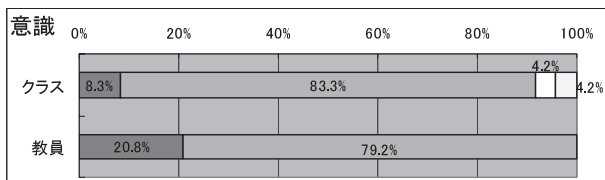
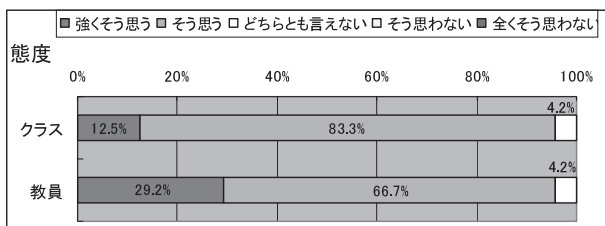


図5 クラスデータとTEデータの比較

結語

以下は、2005年度～2007年度までの、情報リテラシー実践ⅡA Bの満足度の変化である。

	2005年度	2006年度	2007年度
情リテⅡA	3.34	4.02	3.93
情リテⅡB	3.34	3.87	3.69

2007年度に関しては、極端な変化を示しているとは考えられず、比較的、安定した評価の受け方と推察される。このことと、前述したように比較的、学生の学習意欲と教員の対応に見られる両者の関係は、概ね良好であるから、今後は、高等学校での教科「情報」の定着の様子に呼応して、学習内容の精査が検討課題となろう。